

報



會

會 岳 山 本 日

40

月 一 十 年 九 和 昭

風景

田 邊 主 計

始終乗る汽車の沿線などの幾十回となく見慣れてゐる景色でさへ、時刻時刻に變る色彩や日によつて異なる模様などを倦かず眺める事は珍しくない。けれども、フト、氣が付いて、あたりを見ると前の人は居睡り、その隣の人は新聞や週刊の雑誌などを單に時をつぶす爲だけに讀耽つてゐる。そして、その先の人たちはいづれも又居睡つてゐて、誰一人窓外の景色を眺めてゐる人もない所を見ると風景を好むにも人々によつて随分強弱があるやうに思はれる。或る人たちにとつては、風景の美しさは大ていの物の印象よりも心に残るものゝやうである。例へば年少の頃讀んだワツ・ダントンのエルウキン物語の中に現れるキムリツクの少女が今なほ時々心に浮ぶのは、彼女があつた美しい海景を背にして立つてゐるからではないか知らん。又往年見たフランスの「面影」といふ映画に於ても、三人の男の心を奪つてその歐洲の邊境にまで、さ迷はせた當の婦人の顔も言葉も更に記憶に残つてゐないにも拘らず、あのクヌギ林に敷いた残雪の荒涼とした風景が未だ時折目に映るのである。この様な例は誠に多い。いろ／＼の文章や何かを見ても、いつも心に残るのは風景の優れた描寫であつて、人々

の心持や顔や肉體の事などは、たとへ、その時は美しいと思つても、間もなく消去つてしまふ。美しい婦人でも、多くは「婦人を添へた風景」としての場合にだけ愛玩されるのには一部の人だけに見られる傾向であらうか。それとも、大ていの心の美しさや肉體の美しさなんかは寧ろ當然にあるべき事であつて、永く心を捉むやうなものには滅多にないからであらうか。

凡そ、山に登る人たちは風景の美しさを人一倍強く感じる事であらう。山登りからはいろ／＼の楽しみが與へられる——例へば、自分の持つてゐる力の發揮、勞苦の後の休息の快樂、友達との歡談又は孤獨の淋しさと心安さ等たくさんあるが殊に大きな魅力は美しい風景に接する悦びに在る。そして山で行はれる事柄にはどれもこの風景の美しさが背景となつてゐる。

風景の美しさを知り初めると、ますます深く又數多くそれ等に接したいと希つて来る。そして、暇の少ない人たちはこの美しさは焦燥の心持さへ加はつて一そう強く迫つて来るのではないか。多くの人々には少しまとまつた山歩きはそ一度々は出來ない。事によると一年に一度か二度さへも覺えない。同じ處へ幾度

も行つて、しかもその時々新しい魅力を感じ度い。又、未知の美しさを尋ねて新しい所々へも行き度い。それにしても、餘りに暇の少ない、餘りに人生の短い事を感じる人も少なくない事であらう。エフ・エス・スマイス氏のカンチエンジュンガに向ふ途上初めてヒマラヤの山々を眺めた時の言葉もそれに觸れてゐる。彼は夕方の静さの中にテイスタの溪谷をへだて、遠くヒマラヤの山々を眺める。凡そ山岳を愛する人たちの心に等しく起る、喜びと悲しみの混合したこのやうな不思議な心地を未だかつて味つた事はなかつた。

と彼はいふのである。喜び——それは未知への憧れと夢想であり、悲しみは夫等を求めるに、如何に人生が短いかといふことに氣付いてゐた。スマイス氏のやうに散々山を歩いた上、近年はカンチエンジュンガカメツトそしてエグレストへと、まるで我々が種高や立山などへ行くやうに、殆んど年毎にヒマラヤへ入つてゐる人がこの「厭く事を知らない」思ひをするのである。多くの人々の中にヒマラヤの風景を親しく眺め得るものは幾人あることであらうか。

而し、この求められない嘆きから救はれる途がある。人に想像の力が與へられ、多くの幻想を畫き得るのとは何と素晴らしい事であらうか。一枚の地圖を與へられてさへ、人々は、その凸凹の線、いろ／＼の記號から

さまざまの風景を想像する。まして優れた紀行を讀んではその美しい風景を目のあたり眺めるのである。「文字——それは魔法使」である。僅か二十幾種の活字の羅列から斯のやうないろ／＼の光景を見得るのは考へて見ると不思議な氣がする。

主要目次

風景……………田邊 主計…二

●研究欄

凍死か疲勞死か…谷 博…二

●新刊紹介

「霧の旅」……………二

●會員消息

續北鮮の山歩き短報 兒島 勘次…二

●山の消息

新設山小屋、登山團體調査 追補……………二

●會務報告

小集會記事、有志晚餐會記事、定例理事會、新入會員、退會者、會員住所變更、新着、購入圖書、

この文章の表題に「又は讀書のすゝめ」と副題を附けても良いと思ふ後年知己の人たちに別れる人たちの寂寥を一そう親しく慰めるものも自然の美しさであらう。そして、又多くの美しい風景に接し得られぬ事を嘆く人たちは、讀書によつてその幾分か補はれるのである。



研究欄

凍死か疲勞死か

惡天候による遭難の際
に來る嗜眠について

谷 博

死は常に最も嚴肅に、敬虔の心をもつて追想されるべき事實である。神の思召しに従つて捧げられた痛々しい山岳の犠牲者の靈に同じく山登る私はたとへ一瞬なりともその冥福を祈らずにはをられない。命、命、此の最高至上のもの、私達は凡ゆる遭難に對して一切の心なき饒舌をさしはさんではならぬ。只それが如何なる事故によつて惹起したか、如何なる原因が彼を死にまで導いたのかを探索する事のみが私達に許された、且故人が最後に人生に残した命題であり、その検討こそは聊なりとも今後死を未然に防ぐべきとなるものではあるまいか。私はかゝる觀

點に立つて題意の示す問題に觸れてみたい。

從來凍死に對する私達の關心は餘りにも單純ではなかつたであらうか。妙くともその死の直前に來るかの恐るべき嗜眠について、これを凍死の前兆とのみ診ることに重きをおき、疲勞による自體の生理的現象とする認識に缺けてはをらなかつたであらうか。この點に既に二三の人が氣附れ、殊に加藤文太郎氏は「雪上で眠る事は危険だが、温い物を食つた後なら（極度に疲勞して居ないなら）凍死する程眠り込まないで、ある時期になれば氣がつくだらう。」（R.C.C.報告V號一九七頁）とその貴重な體験を語られ、又ケルンX

一夜を過したとき、既に局部的凍傷はうけてゐたにしても、全身的に可成りの暖氣を有してをり乍ら風蔭に入つてからは甚しい睡魔におそはれた。止むをえず烈風に身をさらす事によつて意識の覺醒を圖り、側の友の身を案じながらもこの疑問を思考した事であつた。（關西學生山岳聯盟報告IV號所載拙文「一月の瀟澤」參照）その後前記の加藤、藤原兩氏の論説を讀むに及んで敢て如上の疑問の解釋を試み、併せて兩氏の説の敷衍を企てる次第である。

彼の高名の病理學者Albott氏によれば「虚脱はしばしば體温の下降の際に起るが、それのみによつては從來尙證明されてゐない」といふ。（前掲書七六頁參照）この言葉は凍死の原因として體温下降以外に他の何等かの要因が介在することを指摘したものである。この説を今直ちに肯定することに筆者は少からぬ躊躇を感じるものであるが——それは一介の學生たる筆者として眞に僭越至極のことではあるが——事實多くの遭難例を徴するに、過勞の極、新陳代謝機能が極度に衰弱を來してゐる場合、何等かの精神的影響、又は外來因子がはたらいた際、殊に本論の關係する寒冷度の大きな場合に死は容易に吾人の上に殺到することは明かである。而して吾々はこの場合を殆んど凡て單に凍死とのみ診斷して來たのではあるまいか。尤も山岳第廿八年第三號所載「本邦山岳遭難要項輯録」には疲勞凍死といふ言葉が

凍死の病理學的所見。凍死を來す程度は營養、年齢、着衣等種々の状況によつて異なるけれども、もはや保溫調節の不可能な場合には體温は下降し（Hypothermie）攝氏廿六—廿四度では尙回復が可能であるが、廿四度以下となればもはや回復不可能となり死の轉機をとる。その死因は中樞性體温調節機能の障害により體温が降下し、結局心臓機能の停止を來すによるてふ説と、冷却による呼吸、心搏の低減により心臓機能の停止によるてふ二説があるが何れにしてもその死因は窒息死である。（病理學講義ノート及びL. Aschoff; Pathologische Anatomie, Band I. による）即ち火傷死—成人は全身三分の一の死因—熱による血液の變化、血栓、及び同時に體內蛋白質の分解産物による中毒——とは性質の異なるものであり、全身凍傷（これは一友人が

分明に記載されてあるけれども。即ち疲勞の結果としても、凍死の前兆としても、必ず猛烈な嗜眠態が襲來するのであるが、吾々はたとへば嚴冬乃至は夏季に於ても暴風雨中にかゝる状態に遭遇した場合、それを單に凍死の決定的な前兆としてのみ餘りに恐れすぎて來た。その爲に疲勞困憊の極に陥らんとする哀れな遭難者を大聲で叱り打擲し、その他あらゆる手段を盡して徒に彼の精神のみを昂奮せしめて、肝心の肉體的疲勞回復の機會を與へないで結局彼を空しく不歸の客とならしめた例が從來の遭難例に無かつたと云ひ得やうか。

勿論かゝる際に疲勞者の欲するまゝに睡眠をとらせる事は、睡眠中の人體内の物質代謝機能は當然低減するものであるから、若し彼が甚しい過勞（程度問題であるが）に陥つてゐる場合には、殊に周囲が寒冷等の惡狀況であるときには、加藤氏も危惧される様に、その眠りは永遠に覺醒する機會を得ぬことになるであらう。又死に迄思ひつらぬににしてもことに冬季において最も恐るべきものは凍傷であるが、これは着衣を増すとか、リュックサック乃至は雪中に深く身體を埋没する等の極端な應急手段によつても或る程度まで防護することが出来るものと思ふ。又前記の如く單純な局部凍傷だけでは生命に致命的影響を與へないといふ事はかゝる萬一切迫の場合に何等かの

暗示とならないであらうか。又加藤氏の「或る時期になれば気がつくだらう」と云ふ御意見について少しく述べて見ると、遭難者の体温が未だ高く、発汗してゐる場合には彼が甚しい過勞に陥つてゐない限り、睡眠中におこる汗の蒸發その他の原因による体温の發散によつて、即ち著しい寒氣によつて必ず覺醒し、しかもその間の熟睡こそはそれが少時間であつたにしても極めて絶大な回復性を示すものと信ずる。以上の種々の處置は遭難者の體力を以つてしては到底小舎等の安全な場所に到達出来ない場合にのみ適應されるものである事は謂ふまでもない。尙同伴者特にリーダーに希望しておきたいことは遭難者の素質によつてはその肉體的疲勞程度が僅少であるに拘らず精神的影響が甚しい衰弱をもたらすものであつて、この事はリーダーとして不斷にバーティの上に注意を拂ふべきことであるが、かかる際においては特に極力その排除に努めて頂きたい。

遭難の意識的に、或は無意識的に攝つた睡眠による疲勞回復力の異常に大であることは友人達の示してくれた二三の體験によつても否み得ない。その著明な一例として——恐らく藤原氏もそれを指されたのであらうか、——山岳第廿八年第二號所載「大門山遭難略記」を擧げておく。當事者N氏によつてはまことに御迷惑なことと思ふが、少しくこれを詳述する私の無禮を許して頂きたい。即ち八月十八日入山、廿日路を失ひ夜中豪雨襲來（庇護物無し）廿一日午後驟落氣絶、廿四日未明意識回復九月二日午前十時救助との由。この最後の十日間に亘る超人的努力はN氏の個人的素質によることは勿論であらうが、廿一日迄の、殊に猛烈なブツシュの中に路を失ひ、且つ夜中の豪雨中に殆んど全く防禦物のなかつた事は氏の肉體に大きな悪影響を與へたことと想像する。その疲勞が幸か不幸か偶然の三日に亘る氣絶の間に回復し、剩へ爾後十日間の耐力に大きな効果を與へたと推定する結論、以上において私は惡天候によつて惹起せられた遭難に襲來する嗜眠に對して一應の考察を試み、これを

區別すべきかと云ふ質疑に對しては、この種の多くの遭難例が惡天候即ち凍死の客觀的條件を充たすに足る狀況の下に惹起されてゐる事により、今此處にそれを論斷することの困難さを明に告白しておく。若し敢て極言する事が許されるならば次の如くである。

一、凍死の前兆としての嗜眠の際には、それ迄に一般的な惡症候、殊に劇烈な——あらゆる手段を盡しても尙打克ち難い寒氣を覺える。

二、單に疲勞の結果の生理的要求のみにとづく嗜眠の際には殆んど寒氣を感じない。又たとへこの際外界の寒冷に多少とも惱まされることがあるとそれもそれは適當な防禦方法を與へることによつて防禦し得られる。

最後に嘗て關西學生山岳聯盟の研究會席上で述べられた先輩西堀氏の御説示の大意を氏のお許しのもとに記してこの拙文を擧筆する。それは私達若輩にとつて非常に興味深く且つ多大の共鳴と感激をもつて拜聴したが故に。

「私は決して山では死にはしない」と信じてをります。この信念があればこそ何時何處へ行つても悠々と落着いてやりたいことがやれます。吹雪の中でも面倒臭くなればその儘木の蔭等へもぐつてスヤ／＼と眠る人もあります。そしてこんな時大變愉快に感じます。」

（文責筆者）尙この一文を草するにあたり京都帝大旅行部員諸氏及び一二の學友の有益な御教示を深く感謝しておく。

お断り——文中に記載した藤原氏の一文とはケルンXVI號廿二頁下段——廿三頁下段に亘る一章であつて、これが私をしてこの筆をとりしめた最大の動機であつた。本稿に引用した參考文獻中この一章は是非併讀して頂きたい。

（一九三四・一〇・四）

前號追加

會報三十九號「羽根布團」中三頁下から二段目左より七行目「分量の最大限度三百五十匁」の次に「最少限度二百五十匁」と追加する事を初見氏より通知あり、こゝに追加す。

新刊紹介

紀行隨筆

「霧の旅」

松井幹雄氏著

昭和九年十月朋文堂刊
本文四三四頁定價二圓

主要目次

武田久吉、木暮理太郎兩氏序
霧の旅 一—二七一頁
蕪風帖 二七九—三七二頁
書簡抄 四一五—二二頁
寫眞（二十三枚）著者の撮影に

かゝる。

「霧の旅」には、著者が永眠されるまで面倒を見て育て上げられた「霧の旅」誌への執筆を集め「蕪風帖」には「山岳」「會報」を初め他の新聞、雜誌への寄稿を集め「書簡抄」は著者がその岳友、神谷及び加藤兩氏に宛てたものゝ一部が採録されてゐる。本書には「大菩薩連嶺」に所載のものは省かれてゐるから松井氏の生前物されてゐるものゝ大部分は「大菩薩」とこの「霧の旅」につくされてゐると考へてもよい。

私はこゝに松井氏の遺稿については今迄批評がましい事は書くまい。たゞ本書の内容を一と紹介するに止めた。（黒田孝雄）

山の消息

續北鮮の山歩き短報

兒島 勘次

（五）白頭山附近

（二十萬分の一地形圖、惠山鎮、白頭山参照）

（人夫參名同行）

九月十三日、惠山鎮—普天堡（自動車）
九月十四日、寶泰里
九月十五日、胞胎里
九月十六日、小白山下の藥草採りの小屋
九月十七日、小白山
九月十八日、増岩山、間白山、小嶺

脂峯

九月十九日、白頭山、白岩―關門の
崇徳寺（無住）天池の湖畔を兵使
峯に出て、歸途大膳脂峯
九月二十日、増岩山東麓
九月二十一日、三池淵を経て盧頂嶺
（峠）―胎胎里
九月二十二日、南胎胎山
九月二十三日、惠山嶺
九月二十四日、甲山を経て北青（自
動車）其後、羅南を経て京國線、
南滿本線を大連に出て十月六日歸
京致しました。

尙前號（二）赴職嶺山稜は誤にて、
甲山長津高原と訂正致します。

新設山小屋

桐生高工、仙ノ倉山莊
新潟縣南魚沼郡土樽村字西山東山
魚野川上流仙ノ倉澤と毛度澤の合流
點附近（越後中里驛より約二里の地
點）使用規定は桐生高工山岳部に問
合の事。

登山團體調查追補

溪谷會 千葉縣成田町二四八、代
表者小野幸、創立一九二九年、會員
二八名、機關紙溪谷
金港アマチュア山岳會 横濱市中
區南太田町一九九〇高野方、代表者
高野徹、創立一九三四年六月、會員
一二名、機關誌「プロムナード」



會務報告

第六十二回小集會

昭和九年九月二十日午後七時
三會堂に於て

一、東北の山二三

藤島敏男氏

秋田に二年在つて其附近を歩かれ
た多くの山行のうちから島海、八幡
平等について語られた。終りに此方
面の山について二三所感を述べられ
た。講演の後約二十枚に餘る幻燈板
について更に補足的説明があつた。
講演の内容は山岳に改めて執筆され
る筈であるが極めて有益なものであ
つた。

終に同氏の友人、會員川喜田壯太
郎氏自作の小型映畫（三種）の映寫
があつて、九時半ごろ散會した。

出席者

岩永信雄、伊藤秀五郎、藤島敏男、
黒田孝雄、小林義正、逸見眞雄、足
立源一郎、佐藤誠一郎、飯塚篤之助、
島田興、甲村琴瑚、澤智子、岡本勝
二、谷重雄、大澤照貞、山田多市、
藤枝義男、淺原重機、多賀富藏、田
邊主計、渡邊達三、高頭仁兵衛、磯
野計藏、猶原良一郎、神谷恭、土屋
鎮雄、松方三郎、西川信義、茨木猪

第六十四回小集會

十一月八日午後七時より赤坂三會
堂に於ける日本山岳會の小集會を田
部重治司會のもとに催せり。講演者
は、立教大學教授、駒澤大學講師、
浦口文治氏で、ウエストン氏と殆ん
ど四十年前に信越の山々を登山せる
思ひ出につき、一時間半に亘り、氏
の専門とする英文學の片鱗を時にひ
らめかしつゝ、日本を外國に紹介せ
る外人の功績より説き始め、當時の
ウエストンの言葉を用ひつゝ、ユー
モア豊かな山の話に魅せられた。

その講演の速記録は何れ發表の機
會がある事であらう。その講演後、
一時休憩の後、今年一月、藤島敏男
氏が北海道十勝岳に於いてライカ・
カメラによりて撮影された寫眞の幻
燈があつた。之また、あの美しい雪
の山と、氏が巧妙なる撮影技術と合
せて觀る者をして感歎置く能はざら
しめた。そして十時過ぎ散會した。
浦口氏講演の順序並びに來會者芳名
別記の通り。

ウエストンと歩んだ頃の思ひ出

講師 浦口 文治

、ウエストン氏の立場——日本ア
ルプス踏査、紹介の第一人者

之吉、笈川一、矢田城太郎、木村一
男、額田敏、川喜田壯太郎、橋本晋
七郎、堀川彌一、神津得一郎、岩崎
京二郎、飛川雅之、伊藤朝太郎、横
有恒、中司文夫、會員外十六名、

二、ウエストン氏第四回日本アルプ
ス旅行の七特色
三、ウエストン氏と私との縁故
四、日本に於ける山登りの三階段
五、大連華のぼり
六、鹿島槍のぼりの中止
七、笠ヶ岳のぼり第三回目の成功
八、常念ヶ岳のぼり
九、御岳のぼり
出席者

荒井道太郎、吉田竹志、磯貝藤太郎、
黒田孝雄、田邊主計、廣瀬潔、吉田
禮二、橋本晋七郎、島田興、大澤照
貞、岡本勝二、角田吉夫、春山仙二
郎、前田昌晴、伊藤秀五郎、藤島敏
男、武田久吉、谷重雄、木暮理太郎、
田中哲雄、松方三郎、高頭仁兵衛、
田部重治、冠松太郎、福川嘉四郎、
笈川一、額田敏、村尾金二、飯塚篤
之助、湯淺巖、鍋倉英夫、佐藤誠次
郎、山口成一、川喜田壯太郎、會員
外九人、

有志晚餐會記事

時 十月十一日

所 横濱南京町「萬新樓」

秋の有志晚餐會は横濱に出向して
開いた。來年は日本山岳會も創立三
十年になるといふので、會の創立と
因縁の深い此の土地に於いて開いた
譯である。折からの雨にも拘らず來
會の會員二十餘名、三つの圓卓を圍
んで歡談を交へた、當年の横濱つ子
高野氏が病氣のため缺席されたのが
心残りではあつたが、それでも小島

氏が出席されたし、古くからの會以
である横濱の片平氏なども見え、横
濱に進出した甲斐があつた次第であ
る。今回の世話人は磯野計藏、尾崎
喜八、藤島敏男三氏と決定。

世話人 冠松次郎
黒田正夫
松方三郎

當日の出席者左の通り

廣瀬潔、田邊主計、高頭仁兵衛、岡
植徳之助、岩永信雄、山梯成、冠
松次郎、小島久太、原田恭雄、吉田
竹志、片平重次、伊藤秀五郎、尾崎
喜八、黒田正夫、磯野計藏、神谷恭、
飯塚篤之助、足立源一郎、松本善二、
塚本繁松、藤島敏男、松方三郎、石
原慶、櫻内敏雄、伊藤朝太郎、

十月定期理事會

十月四日午後六時、赤坂溜池あす
ならうにて

出席、評議員、高頭、小島、高野、
武田、冠、嶺、三枝、（以下委任）
近藤、中村、木暮、
理事、松方、島山、神谷、田中、
伊藤、飯塚、茨木、三川、三木、
黒田、逸見（以下委任）高橋、津田
一、山岳第二號編輯ノ件
一、會計報告

○評議員會

十月四日引續き評議員のみにて同
所に開催。

一、會員藤島敏男氏を評議員に推
薦の件可決。

○役員總會

十月四日更に引續き同所に開催
一、來年度新任理事候補者五名を推薦の件、會員中より推薦し、夫々交渉することに一決す。

十一月定例理事會

十一月一日午後七時於事務所出席 高頭、松方、額田、神谷、黒田、伊藤、田中（以下委任）飯塚、福島、
一、山岳第三號編輯報告
一、山岳第二號中旬發刊の豫定
一、來年度理事候補者の決定
一、關西小集會の件

退會者

昭和九年十月中

(一〇一六) 愛知縣 神田 定雄
(一四七〇) 大阪市 北川 保
(一四〇一) 東京市 道祖土 剛
(一三一九) 大阪市 大曾根昌平

新書圖書

霧の旅 松井幹雄氏遺稿、霧の旅會
高原(山特輯) 梓 書 方
島の渡り(野島特輯) 同
山小屋 十月號 朋 文 堂
ケルン 同 同
登山とスキー 同 黎 明 社
寫眞月報 同 小西六本店
地學雜誌 同 東京地學協會
ツリースト 同
ジャパンツリーストビュロー
岳 樺 第一七號 日本銀行山岳會
山行案内 十月號
山 同 昭和マウントクラブ
山 同 横濱山岳會
山 同 東京山彦山岳會
獨立樹 同 東京山旅俱樂部
朝紅 同 高嶺朝紅會
黒木立 同 關東岳愛會
樹 米 同 山人俱樂部
山 旅 同 神戸山旅俱樂部
旅 路 同 關東旅行クラブ
旅 行 同 東京旅行クラブ
旅 同 東京アルカウ會
アルカウ趣味 十、十一月號
山 九、十月號 日本アルカウ會
旅の趣味 十一月號 東京野歩路會
山 幸 九月號 大坂ミテコー會
山 徑 八月號 坂神山岳會
東京市山岳部々報 M C R 山岳會
武藏山岳會報 十月號 同

東京登歩溪流會報 同
みなかみ會報 同
奈良山岳會報 同
宇都宮アルコウ會報 同
臺灣山岳會報 同
奧多摩山岳會報 同
日本登高會報 同
がくれい會報 同
東京アマチュア山岳會報 同
明峯山岳會報 同
關東山岳會報 同
京都山岳會報 同
獎健會ワンダーフォーゲル部報 同
山人會月報 二四—二六
武藏野を探索會報 十月號
大阪鐵商陸會スキークラブ會報
荒井道太郎譯 山！ 朋 文 堂
西岡一雄著 泉を聴く 同
高畑棟村著 行雲と共に 同
The Geographical Journal Vol. LXXXIV No.3 Sep. 1934
Sierra Club Bulletin vol. XIX No.4 Aug. 1934
The Mountaineer vol. XXVI No.11 Oct. 1934
Trail and Timberline No.191 Sep. 1934
DIE ALPEN No.9 Sep. 1934
Butlet del Centre Excursions-ta de Catalunya Any XLIV Num.471 Agost de 1934
Natural History vol. XXXIV No.6 Oct. 1934
Club Alpino Italiano No.8 Set-

embre 1934
Appalachia vol. XX No.6 Oct. 1934
The Prairie Club Bulletin No. 239 Oct. 1934
Unione Ligure Escursionisti n. 9 Settembre 1934
Pianiski Vestnik Stev. 10 Le-to 1934
Turist-og Reiseliiv Nr.3/5
以上 栗飯原健三氏
購入圖書
Abate Achille Ratti :-
Climbs on Alpine Peaks 1923
Sven Hedin :-
Trans-Himalaya Discoveries and Adventures in Tibet Vol. 1, 1909, Vol. 2, 1909, Vol. 3, 1913.
Lord Conway of Allington :-
The Alps From End To End 1894
The Autobiography of A Mountain Climber
Gottlieb Studer :-
Über Gletscher und Gipfel Herbert Stevens :-
Through Deep Defiles to Tibetan Uplands
Claud Schuster :-
Peaks and Pleasant Pastures Sven Hedin :-
A Conquest of Tibet
Huge Rutledge :-
Everest 1933.

スキーフックス

Silver

SKI WAXES

FOR CLIMBING & DOWNHILL.

絶對に 舶來品に優る

シルヴァーワツオル

スキーフックス研究會(帝國森林會内)

林學博士、三浦伊八郎先生創製

MEDIUM.

MIX

KLISTER.

SOHM-RED.

TENTO.

新發賣

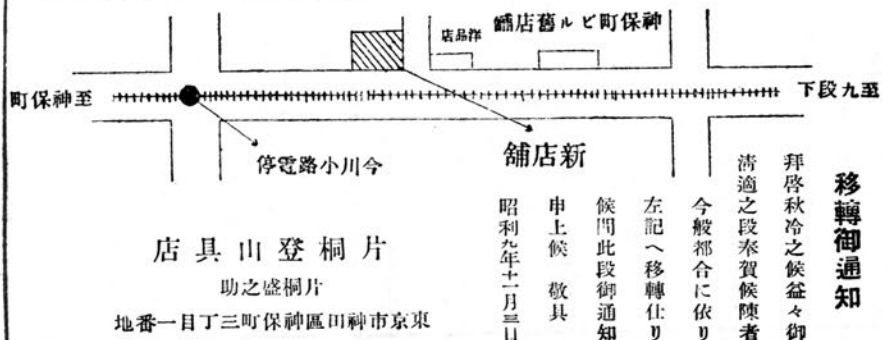
液體ワツクス
洗淨用クリーム

各有名百貨店
運動具店ニ在リ

合名會社 美滿津商店

東京・本郷・赤門前

TEL(山元川)(85) 845-2071



移轉御通知

拜啓秋冷之候益々御
清適之段奉賀候陳者

今般都合に依り

左記へ移轉仕り

候間此段御通知

申上候 敬具

昭和九年十二月三日

昭和九年十月十八日印刷
昭和九年十月二十日發行

發行 者 額 田 敏

編輯兼印刷人 逸 見 眞 雄

發行 所 日本山岳會

(本二層ビル)

電話・芝・一六四九番

廣店一手取扱 進 恒 社

電話・四谷・六九四番

(多木印刷所印刷)